

令和8年度第1回福島県総合教育会議 議事録（概要）

1 日 時	令和8年8月24日（月）13時30分～15時00分
2 場 所	自治会館 3階 大会議室
3 出席者	知 事 内堀 雅雄 教育長 鈴木 竜次 教育委員 吉津 健三 午來 勝頭 高橋 理里子 平塚 康晴 横田 純子 ＜五十音順に掲載＞ 事例発表者及び随行者 福島高等学校 守谷 史佳 教諭 菅野 陽介
4 議事内容及び経過	（1）開会 事務局（政策調査課長） （2）議題 ＜ 議題1 福島ならではの「探究的な学び」について＞ 【知事】 議題1、「福島ならではの「探究的な学び」について」、義務教育課、高校教育課から説明をお願いする。 次に、「探究EXPO」に参加される福島高校の守谷さんから、探究活動の内容等について発表していただく。 － 義務教育課長、高校教育課長から資料1に基づき説明 － － 福島高校の守谷さんから資料2について発表 － 【知事】 守谷さん、ありがとう。すばらしい発表だった。 多様度高い、低い、あるいは類似度が高い、低いという結果が出ているが、福島県内やほかの地域で類似の研究が行われているのか。 また、信夫山の多様度や類似度の状態は、生物学的に見ると良い状態なのか、危機的な兆候が見られるのか、考察はできるか。

【守谷史佳】

蝶類では、類似度や多様度などで研究しているものはない。ほかの生物では、先行研究がある。

現在の多様度や類似度の状態は、比較的良好な状態にあると思う。

【知事】

ありがとう。

それでは、委員からコメント等を頂く。

【午來委員】

いろいろな蝶が信夫山の周辺におり、多様性があることがよく分かった。

先ほどのお話を伺い、暖地性の種が増えているということだったが、先日、いわき市に行ったときに、アオスジアゲハをたくさん見た。今の説明を聞き、気候が変化していることに改めて気づかされた。

今後こういった知見を多くの方に教えてあげてほしい。

【横田委員】

発表ありがとう。すばらしかった。

蝶はどのくらい移動するのか教えてほしい。

【守谷史佳】

平均すると500メートル程度。

アサギマダラなど大陸から大陸に渡っていく蝶もいる。

【横田委員】

外来種が入ってきたことにより、餌や場所等の取り合いなど、もともといた蝶にどういった影響が出るのか、今後、すごく大事な調査になると思う。

これが、福島県の蝶の調査の第一歩だと思うので、是非、続けていただきたい。発表ありがとう。

【吉津委員】

発表ありがとう。

発表の素材、研究内容が、しっかりしていて、非常に興が味ある。

この分野に取り組みたいと思った動機と、どのくらいの時間をかけたか教えてほしい。

【守谷史佳】

小さい頃から昆虫採集に出かけていた。最近、とある種を見かけなくなった。また、新しい種がいることに気づき、気になって調べた。福島盆地の蝶類に関して、先行研究

がなかったため、研究を行った。

2週間に1回のペースで調査を実施し、長くて5時間、短くて3時間ぐらいかけている。分析等もあるので、正確な時間は分からない。

【吉津委員】

昆虫など多く生息している地域で育ったが、守谷さんのような着眼がなく、同じ風景と同じものを見ていても、着眼があるかないかで、全く構造が変わってくることに気づかされた。

すてきな発表をありがとう。

【平塚委員】

守谷さん、発表ありがとう。

今回、この発表の資料を事前に見させていただいて、自分でも興味を持ち、調べる機会となった。

5類の蝶の種類全てが、福島に生息しているとのことだが、偏っているイメージを持っていた。この発表で分かって、とてもよかった。

今後、温暖化によって、外来種を含め蝶の種類や蝶を餌としている鳥などにも変化が生じるだろうし、すごく興味を引かれた発表だった。

バタフライエフェクトという言葉があるとおり、守谷さんの発表が、皆さんの蝶に関することや、守谷さんのこれからの人生を、もっと羽ばたかせるものと期待している。

【高橋委員】

すばらしい発表をありがとう。

多くの時間をかけて、自分の研究に自信を持って、胸を張って、自分の言葉で発表していただけた。

発表を伺って、改めてなぜ今、探究的な学びが重要なのかを感じることができた。今日の発表で象徴的だったのが、自分の好きなこと、子どもの頃から好きな昆虫で、現在この福島盆地の蝶類群集にどんな特徴があるのだろうと自分の身近な地域から生まれた思い、これが出発点になっている。そして、時間をかけて調査し、データを集めて、何よりすばらしいのがその分析である。

起きている現象に対し、その現象が引き起こしている要因分析を丁寧にされ、その結果から今度は暖地性の種や外来種など、次の問い、次の課題が生まれ、そこにつながろうとしている。これが正に探究だなと思った。

自分で問いを持って、確かめて、考えて、そこからまた新しい問いが生み出されている。すごいことだと思う。

今日の発表には、「福島ならではの」を考えるヒントもあると思う。地域探究というと、人口減少、観光、産業、復興など、大人が考える地域課題を見せてしまいがちだが、今日の発表は御自身の興味・関心から福島のフィールドを見つめている。その結果から今

日のようなすばらしい発表をしていただいた。

一つ、質問がある。守谷さんは、この先どんなことを極めていきたいか。どんなことをやってみたいと思っているか教えてほしい。

【守谷史佳】

こういった研究を趣味の傍らで、少しでもやっていきたい。

【教育長】

守谷さん、発表ありがとう。

福島県では、「探究的な学び」を進めている。

福島県は、震災後、多くの困難な課題に直面しているだけでなく、守谷さんが研究したように、身近なところにも多種多様な素材がある。

難しい課題から身近なところまで、興味・関心、好きなことを極めていけるフィールドだと思う。

今までは、先生から一方的に教えられるような学びをしてきたが、今の高校生は自ら問いを立て、いろいろな情報を集め、その問いの答えを見つけていく。さらに、新たな問いが出てくる。それらを繰り返して、深い学びをしていく。

教える教師の側も、しっかりと支えながら授業等を進めていけるよう、(教育庁としても)施策に取り組んでいく必要がある。

【知事】

研究で、大変だったこと、つらかったこと、楽しかったこと、面白かったことなどあれば、教えてほしい。

【守谷史佳】

つらかったのは、分析。パソコンにデータを打った後の補正など、時間がかかって大変だった。

うれしかったことは、蝶の調査に出かけたときに、アオスジアゲハやムラサキシジミ等を今まで見たことがなかった場所で記録することができたこと。

【知事】

正に福高の博士ちゃんだなと思う。検証作業など、苦労もあったことと思う。

一方で、ここにはいないはずの種を見つけることができたことが喜びであると言ってくれた。探究学習は、探し求めるということになるが、正にそのとおり。守谷さんが今回、この研究を通じて、御家族の力を借りながら見事に成し遂げたことに敬意を表したい。

今回、いよいよ9月12日に開催される「探究EXPO」では、多くの方に子どもたちの探究の成果を見てほしい。

今日、守谷さんの発表に大人が皆感動しているが、守谷さんよりも、年が小さい、若い世代にも間違いなく響くと思う。若い世代が守谷さんの説明をシンプルに「格好いい」と思うのではないかな。

堂々とプレゼンする姿、そして、内容がとにかく難しそうな研究に取り組んでいる。一方で、蝶の話だから、画面を見ているだけでも楽しい。そう思ってくれる小学生、中学生、高校生たちが、またこの「探究EXPO」の中で、生まれ、次の博士ちゃんを目指したいと思ってくれば最高だなと思う。

自分のやりたいことを極める中で、感動を与えるすごくすてきな趣味でもあり、また、仕事の選び方によっては仕事そのものが、そういう形にも十分なる。

守谷さんのこれからの学び、そして探究を楽しみながら頑張してほしい。

< 議題2 県立高等学校の魅力化について >

【知事】

「県立高等学校の魅力化」について、担当課からそれぞれ説明を行う。

教育総務課からは、6月に国から採択を受けた「N-E. X. T. ハイスクール構想」に基づく、取組について説明する。

続いて、次世代産業課から、「産業直結型人材の育成」の観点から、再エネ・水素関連産業の振興と人材育成の取組について説明を行い、その後、皆さんとの意見交換に移る。

- ー 教育総務課長から資料3に基づき説明 ー
- ー 次世代産業課長から資料4に基づき説明 ー

【知事】

今の説明を踏まえ、教育委員の皆さんからお話を伺いたい。

【高橋委員】

先ほどの「探究的な学び」につながってくると思うが、高校の魅力化は、教育庁と知事部局の強い連携が必要である。

今、次世代産業課から御説明のあった、再エネ・水素についても、高校生、大学生、企業までを一つの流れとしてやっただいている。すばらしいと思う。

しかし、先ほど知事から、博士ちゃんの話があったが、博士ちゃんの多くはほぼ小学生である。小さな子が中学生、高校生になって、より専門性を高めている。

小学生、中学生に、こんな難しいことは理解できないだろうと、私たちがアンコンシャスバイアスを盛り込むのではなく、よく分からないがすごいと思えるようなものに、その年齢から触れさせてあげることで、初めてそちらに興味・関心の対象がいくのかなと感じた。

当然、産業政策からみれば、エネルギー分野の人材がこれから必要になってくる、育てていくというのは大事なことです。

ただ一方で、県にどんな人材が必要なのかだけではなく、この子は何をしたいのか、これがすごく重要な部分だと思う。

自分で問いを立て、考えて、選択できる人を育てるのであれば、その先の進路についても本人が主体的に選べる環境が大事になってくる。

福島にとって必要な人材を育てることと、若者自身の興味や可能性を、福島にある仕事や産業につなぐこと、これを双方向で考えていく必要がある。

資料に記載のある若者の流出や女性の流出は、この中でもすごく重要。特に女性の理系進学や工業高校への入学を増やすだけでなく、その先に専門性をいかせる仕事、あるいはライフイベントで諦めずにキャリアを継続できる働き方がなければ、女性の県外流出は課題解決につながらない。

高校の魅力化は、魅力ある学校をつくるだけで完結するものでは決してなく、高校卒業後も福島で自分の人生を描ける地域をつくることとセットで考えていただく必要がある。

だからこそ、教育庁と知事部局が一体となって取り組まなければいけない。

資料中に、「将来、福島で生活したい生徒数UP」とあるが、すごく良いこと。若者を福島に残すのではなく、自分の未来の選択肢の中に福島も入る、そういう県にする。そして、福島でも自分の人生をきちんと舵取りができる、若者自身がそう思える県をつくる、そのための高校魅力化であってほしい。

【知事】

今、県では、「感働！ふくしま」プロジェクト、感じて働くプロジェクトを実施している。これは、若い方に残ってくれということではなく、選択肢として、福島に魅力的な職場がある、カッコいいお兄さん、お姉さんがいて、皆、良い顔をして働いている。その上で首都圏でも、大阪でも海外でも、いろいろ選んだ上で決めてくれればそれでいい。そういうことを言いたいだけ。

教育庁の大事な仕事「高校の魅力化」と知事部局の仕事、そして、実社会がつながっていかないと、ストーリーが生きてこない。

【平塚委員】

先般、全国都道府県教育委員会協議会に参加し、公立高等学校の魅力向上について、協議した。

分科会の中で、各都道府県では同じような取組や課題もあったが、いくつか違うものもあった。

例えば、小学校や中学校で進んでいるコミュニティ・スクールを高校でも取り入れる県があった。

福島県も、小規模校の学校では、コミュニティ・スクールを進めているが、高校でコミュニティ・スクールがある学校は少ない。

コミュニティ・スクールの中で、地域や企業の方々、もしくは大学関係者の方々が入

って取り組んでいくと良い取組ができるのではないかな。

また、高校の魅力向上のために、保護者や生徒にアンケートをとっている県もある。

福島県の普通科では、医学コース、保健医療コース、教育コース、福祉コース等の構成があり、特に教育コースでは、各市町村の教育委員会の協力の下、実際に現場で、実習等の経験をしている。

先日の「県庁にみんなの声を届けよう」プロジェクトの中でも、橘高校に参加いただいた。すごく良い体験ができています。

福島県は令和4年から教育コースを開始し、他県と比べて進んでいる。教育委員会の中で、私の発表を聞いて、メモをとっている方々が多かったとの声も頂き、皆さんの参考になれたかなと思った。

今後、教員コースで学んできた生徒が、先生になりたいという思いを拾い、大学まで進んでいけるような、そういった道、体制がつくれると、生徒も増えてくるかなと思う。

また、理系人材の確保を進めていくに当たって、工学部系が少ないほか、大学生の進路で、地元に残る方々が少ないこともあり、改善ができればいいかなと思う。

県立高校の学校説明会は毎年夏に実施されるが、学校説明会や体験入学の回数が非常に少ない。例えば、夏休み1回だけ行うような状況。私立高校であれば一週間の期間を設けているが、県立学校は一日という状況。申込みの期日も短く、日時が合わないで見学できない保護者や生徒がいないような形にしていく必要がある。学校側の目線ではなく、生徒や保護者に寄り添うような対策がとれば良いのではないかな。

【吉津委員】

次世代産業課から説明があった中で、「県内エネルギーの需要の100%以上に相当するエネルギーを再生可能エネルギーから生み出す」という目標があり、2024年度で59.7%の実績があることは、すごいことなのではないかな。

こういった事実は、あまり知られてない可能性もある。このような研究開発を福島が進めていて、客観的な数字もたたき出していること等を子どもたちに知ってもらうことが初めの一歩だと思う。資料の中で、福島再生可能エネルギー研究所が高校生向けに見学を行っていると記載されているが、もしかしたら分からないまま、子どもたちの視点が東京になっていると非常に残念と感じる。

人材育成は教育庁とも関係している。横断的な取組として、見学等を通して、福島の足元を見つめてもらう取組を進めてほしい。

見学等を進めるとなると、バス代の負担についても考える必要がある。「ネーミングライツ」のような発想で企業からお金をだしてもらうこともできるのではないかな。企業の宣伝にもなるし、そこに行くと必ず視界に入る。企業の気持ちもくすぐると思う。お金は有限でも知恵は無限。部局横断で、その辺りの検討もお願いしたい。

【知事】

イノベーション・コースト構想を福島の若い方、国内、海外の方に知ってほしいと思

っている。そのため、県では、いろいろなモニターツアー等を企画している。例えば、高校生、大学生等も、ロボットテストフィールドや福島再生可能エネルギー研究所などに、実際に行って、見ていただく。その場合、当然旅費等も必要なので、直接バックアップする制度がある。これからも継続していきたい。

企業の力は非常に大事。例えば、子どもたちが海外に留学する際のお金、こういった基金に共感して、協賛してくれる方がおられる。

また、福島では子ども未来基金があるが、いろいろな企業が浄財を出してくれ、それを「福島ならではの」体験型教育の原資にしている。

ネーミングライツ等も含め、共感してくれる企業、事業者の力を借りて、福島の若い方たちが伸び伸び育っていく、こういうオール体制をつくっていきたい。

【横田委員】

江戸時代、藩が一番力を入れていたのが人材育成だった。

人が集まる国は、そこが良い国だからどんどん集まってくる。また、この人と一緒に働きたいと思う人たちが集まってくる。

福島県の企業には、魅力ある方がたくさんいると思っているので、その方たちと学生が連携する、触れ合う時間が必要だと思う。こんなにすごい大人がいるということが分かる時間が、こういった取組を実現できると思う。

もう一つは、モデルをまねるのではなく、モデルになれる福島県を目指してほしい。福島県のようになろうと思ってもらえるような事例をどんどん発表してほしい。途中経過を発表し続けることで、ファンをつくっていく「プロセスジャーナリズム」という手法がある。途中経過を見せていくことは大事なこと。

福島の取組も多くの方々に知ってもらい、福島県民自身が、「福島は今こんなことやっているよ」と言えるぐらい、情報発信をしていただければ良い。

学生たちにとって、「戻りたい福島」になってもらえたらと思う。

【知事】

今年は、県政150周年である。この150年を学び直しているところ。その中でも、やはり教育、人材育成にどれだけ思いをかけられるかが大事。

先月、新潟・山形・福島の3県知事会議を長岡市で行った。長岡藩は飢饉になったとき、コメ100俵を全部、教育のために使った。言うのは簡単だが、やるのは相当大変だったと思う。

そういった覚悟を歴史として私たちが学び、それを今の時代どうしていくか、令和の100俵は何だろうということを考えなければならない。

【午來委員】

私は教員だったので、その経験からの話をしたい。

資料に「文理、双方の素養を有する人材の育成」とあり、心に残った。私が高校で学

んだ頃は、もう決まったコースがあつて、そこに乗っていかないと駄目だという空気感みたいなのがあつたと思う。今はそうではないと思うので、是非、文系や理系ではなくて、総合的に子どもたちが学び、そして自分でいろいろなものを見つけたり、次のものに関心を持ったりしながら、子どもたちが育っていくことが、高校教育の魅力化にとても大切なことではないかと思う。

もう一つ経験したことがある。相馬女子高校は相馬東高校になり、相馬総合高校となった。女子校から東高校になったときに、私が担任した子どもに会い、「今度、東高校に行く」と、意欲的に話をしてくる子がいた。新しい学びができる、新しい学科で学ぶことができる、自分の可能性を広げていくことができる、そういった彼らの思いを聞くことができた。そのような思いに応えられる高校づくりをしていかなければならないし、子どもたちにも小・中学校の頃から、この高校に行くという良い学びができるというPRする場を設けていくべきだと思う。

資料の中で、高校だけでなく、県立テクノアカデミーの内容も書かれている。私は、テクノアカデミー浜で学んだ学生の姿も見てきた。例えば、自動車の整備等を学んだ学生が、現場で「こういうことができる」「こういうことを学んできた」とすごく意欲的に、そして自信を持って、お客様に対応している姿を見ている。そういう教育が受けられる環境づくりを福島県としても大切にしていかなければならないと思う。

【知事】

今回の「N・E・X・T.ハイスクール構想」の「N・E・X・T.」は、新しい扉を開くということを含んでいると思う。これまでなかった、おもしろい学びや新しい学びがそれぞれの県立高校の中にあることを、できるだけ多くの生徒や親御さんに知っていただきたい。

皆さん、固定観念があると思うが、高校改革の中で、変わっていくということを、親御さん等を含め、分かってもらわないと、本当の意味での進学先を選ぶときの良い選択にはならない。

【教育長】

高校の魅力化については、「第7次福島県総合教育計画」を基に進めている。その中で、全日制普通科の各コース、教育コース、医学コース、福祉コースなど、特色のあるコースを設け、魅力化を図ってきた。今後、会津高校は、文理融合型の「学際領域」を設けて、新しい学びを展開していく。

「第7次福島県総合教育計画」を進めていく中で、今回、国から「N・E・X・T.ハイスクール構想」が示され、「各県、とにかくとがったことを考えてください。」と言われた。

福島県として、とがったこと、何をやろうかということで、まずやはり、イノベ構想などの国家プロジェクトといった素地が福島県にはある。これに寄与できるような魅力化の一つとして、フィジカルAIやエネルギーインテグレーターを学べる、産業・イノベ構想に直結できる人材を育成していこうと考えた。

二つ目として、福島県の「探究的な学び」を更に社会実装につなげていくために、企業の方々と子どもたちがつながって、新しい学びができるようにしていこうと STEAM Lab（スチームラボ）などで学べる福島高校を拠点校とする第2タイプの学びを盛り込んだ。

また、過疎中山間地域では、子どもの数が減っているが、学校は残さなければならない。そういう中で1学級本校化を進めてきた。1学級本校化は、子どもの数に応じて先生の数も決まってしまう。例えば、生物を学びたくても生物の先生がいない。

学びたい子どもたちにどのように学びの機会を保障していくか。メタバースやVRなど、オンラインを活用した新しい学びを展開していく、機会保障型の学びをしていこうと考えた。

こうした新しい学びの選択肢を今回提示し、何としても成功させ、他の学校にも普及させることによって、「福島県ならではの」の高校教育を是非展開していきたい。

【知事】

今、皆さんと一緒にN-E.X.T.ハイスクールやイノベ構想も含めた人材育成の話を展開してきた。

守谷さん、大人たちがこうやってやり取りしていることを「見て」「感じた」ことを教えてください。

【守谷史佳】

今の子どもや、将来学んでいく人のことをすごく深く考えてくれて、ありがたいと思う。

【知事】

菅野先生からも一言お願いします。

守谷さんの先ほどの活躍に対する感想や、福島高校はN-E.X.T.ハイスクールで、正に筆頭校でもあり、それに対する思いなどあれば教えてほしい。

【菅野 陽介】

私は福島高校で、スーパーサイエンスハイスクールの主任をしている。そして、守谷の指導教官という立場でもあるが、正に、探究で育てていきたい生徒の代表例として、今日、守谷を連れてきた。

守谷は自走しており、自分の興味関心をエネルギーに、がんとエンジン回して探究を力強く進めていっている。こういう生徒をこれからも福島高校では育てていきたい。

N-E.X.T.ハイスクールについては、私自身も非常にわくわくしており、次の新しい教育を実現していきたい。新しい部分については、子どもたちがもっと好きを伸ばしていける、子どもたちの興味関心をもっともっと高めていける、そういう環境をつくっていきたい。

【知事】

N・E・X・T.ハイスクールは、教育庁と知事部局で一丸となって対応している。文科省からは、福島県がこのN・E・X・T.ハイスクール構想で県立高校の魅力化をし、次の新しい扉を開いてほしいと言われている。

守谷さんみたいに、自分がやりたいことをやり、自走する。自分でどんどん爆走していってくれる子を育てる。それがやはりこのN・E・X・T.ハイスクールの一つの大事な姿だと思う。今日このメンバーと菅野先生から頂いた御意見、守谷さんの先ほどのプレゼンを見て、我々のとがった目標は、これが一つの形だろうなと実感した。

皆さんどうもありがとう。

＜ 報告事項 1 教職員働き方改革に係る「業務量管理・健康確保措置実施計画」について ＞

【知事】

報告事項 1、教職員働き方改革に係る「業務量管理・健康確保措置実施計画」について、職員課から説明をお願いします。

ー 職員課長から資料 5 に基づき説明 ー

【知事】

教職員の働き方改革は大事である。

生徒が目輝かせて、育っていくためには、目が輝いている先生がいてこそ。

県教育委員会、市町村教育委員会、力を合わせ、働き方改革に取り組んでほしい。

以上で本日の議題を終了する。

皆さんの熱い思いに感謝する。

(3) 閉会

事務局（政策調査課長）